

下田市オリーブのまちづくり事業推進計画



令和元年6月
下 田 市

～目 次～

○ 計画の目的・・・・・・・・・・・・・・・・	1
○ オリーブの導入について・・・・・・・・	1
○ 計画の前提条件の整理・・・・・・・・	2
○ 下田市オリーブのまちづくり事業3つの要素・	3
○ 計画の期間・・・・・・・・・・・・・・・・	3
○ これまでの取り組み・・・・・・・・・・	4
○ 下田市営オリーブ試験農園・・・・・・・・	5
○ オリーブを知る・・・・・・・・・・	6
○ 事業推進計画	
・育てる（植える・実らせる）・・・・・・・・	10
・地域づくり（市民参加・人材育成）・・・・	12
・活用する（商品開発・事業化）・・・・	13
○ 推進体制・・・・・・・・・・・・・・・・	14

§ 計画の目的

下田市では、農地の活用と新たな農作物の導入による農業生産の振興を図るとともに、栽培、加工から商品開発までを一貫して行う6次産業化により、下田市の新たな特産品づくりを目指し、平成29年度より「下田市オリーブのまちづくり事業」を開始しました。

現在、下田市地域おこし協力隊の参画を得て、試験農園の管理とオリーブの栽培方法の研究を含めたオリーブ事業全般に亘って活動を進めています。

これまでの活動を継続するとともに、市民参画を主軸とした「下田市オリーブのまちづくり事業」を総合的かつ効率的に推進するため、短期的・中期的な計画を策定するものです。

§ オリーブの導入について

オリーブはその果実の利用だけではなく、育てる楽しみや、鑑賞する楽しみなど多くの魅力を持ち合わせています。

また、オリーブオイルの輸入量は増加傾向にあるとともに、国内の栽培面積は拡大の一途をたどり、注目も高まっています。

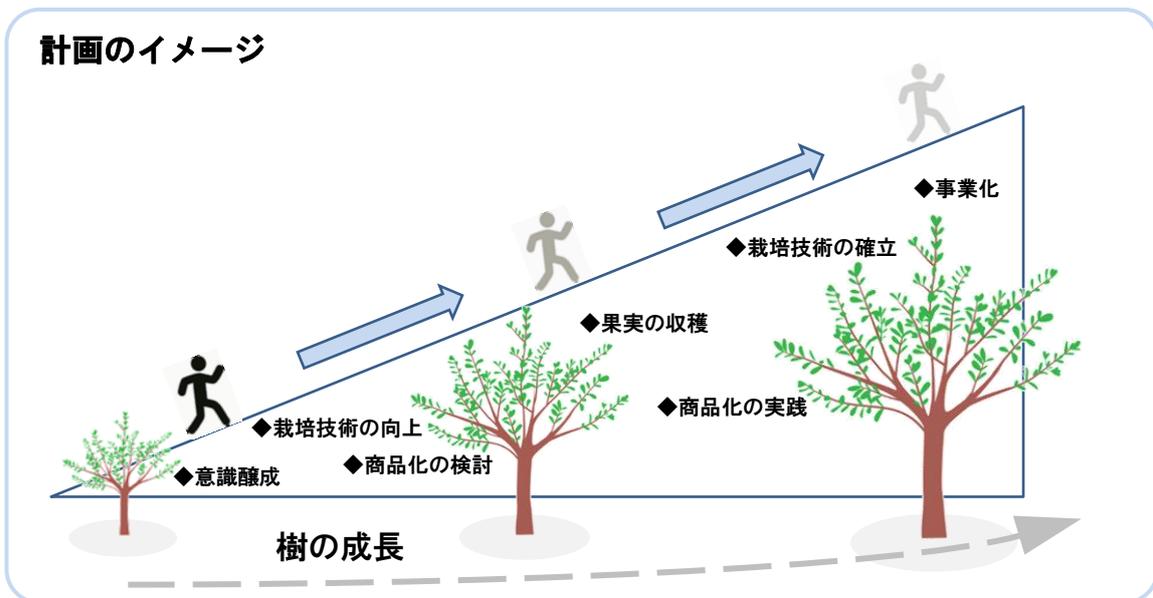
オリーブは夏季乾燥・冬季湿潤を特徴とする地中海付近が起源とされる植物ですが、本市においても栽培環境を整えることにより十分に栽培可能であると考えられます。

本事業では、こうした多くの魅力を持ったオリーブを、新たな本市の特産品とすべく、官民協働の栽培研究や商品開発を通し、オリーブを核とした市民自身の手によるまちづくりを推進するものです。

§ 計画の前提条件の整理

(1) オリーブの樹の成長と計画について

オリーブは植付け後、約3年目から実がつき始め、本格的な収量を得るには、個体差や育て方及び植樹環境にもよりますが5～6年が必要です。本計画はオリーブの樹の成長に歩調を合わせ、段階的に進めていくこととします。



(2) オリーブによる活性化の方向性

国内のオリーブ栽培は、小豆島を起源として岡山県、広島県、九州全域に多く、特に近年においては静岡県内で作付面積が拡大しています。

これらを背景として、本事業は、下田市ならではの特色や地域性を発揮する差別化と活性化が求められます。果実の収穫を見据えた、実現性が高い事業の方向性を定める必要があります。

(3) 下田市民による事業化の推進

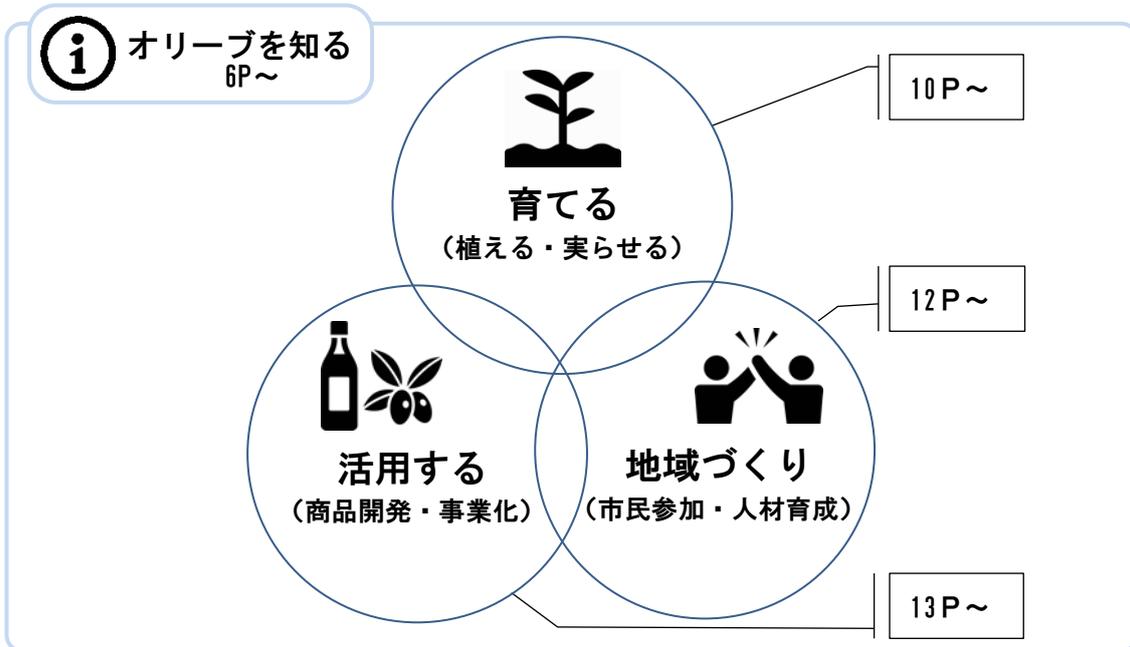
近年オリーブオイルの需要は拡大の一途ですが、利用されるオイルのほとんどは輸入したものであり、国内産オリーブオイルのシェアは1%以下です。シェアは低いですが、品質が良く、国内産オリーブは注目を集めています。

しかし、日本人が日常生活の中でオリーブ製品を効果的に活用しているとは言い難く、日本人のライフスタイルと嗜好にあったオリーブ商品の開発や、オリーブで日常生活を豊かにするアイデアが必要です。

これらは下田市民の生活体験と工夫によって創造されるものであり、それ自体が下田産オリーブの差別化と商品価値になると考えられます。このため本計画では、これら市民のアイデアが事業に反映される仕組みを構築する必要があります。

§ 下田市オリーブのまちづくり事業3つの要素

事業の推進に当たっては正確な情報（オリーブを知る）を基礎とした、3つの要素（育てる・地域づくり・活用する）が事業を形成し、それらが単独ではなく、相互に連携しながら取り組む計画を策定します。



§ 計画の期間

事業の計画は令和6年度を目標年次とし、当市に合った栽培技術確立と将来的な利活用・商品化を見据え、栽培と利活用を相互的に関連付けながら進めるため、下記のとおり実施します。ただし、令和4年度時点で中間見直しをすることとし、また、必要に応じて随時見直しを行うこととします。

	随時見直し			中間見直し		目標年次
現在	ステップ1（導入期）			ステップ2（成長期）		
H30年度	R元年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
計画策定	当市に合った栽培技術の確立					
	（基礎・意識醸成） 下田市でオリーブを育てること、市民にオリーブを身近に感じてもらうことを主眼に置きつつ、利活用の目的に応じた基礎的な栽培技術の確立に向け取り組みます。			（応用・改良） ステップ1から継続して研究を行い、より効率的な収穫（早期の収穫、収量の増大）が見込める高度な栽培技術を確立し、事業拡大を目指します。		
	利活用・商品化の実施					
	（検討・試行） 栽培技術確立の進捗を踏まえつつ、当市で予想される収量に応じた利活用方法の検討と試行に取り組みます。			（実践・拡大） ステップ1の検討・試行を踏まえ、本格的な利活用・商品化に取り組み、ビジネスモデルとしての確立（事業化）を目指します。		

ステップ3へ

§ これまでの取り組み

市では「オリーブシンポジウム in 下田」をはじめとした市民講座や苗木の配布事業等を企画し、多くの市民の皆様に参加していただきました。



シンポジウムの様子
講演：「下田でオリーブを育ててみる」
協力：伊豆白浜オリーブ園

市民参加の取り組み

平成 29 年度			
開催日	開催内容	会場	参加者
5月21日	事前勉強会	市役所	15人
7月2日	オリーブシンポジウム in 下田	市民文化会館	130人
10月19日	新漬け教室	中央公民館	22人
10月31日	栽培基礎講座（第1回）	市民文化会館	24人
11月7日	植樹体験講座（第1回）	権原試験農園	25人
12月13日	栽培基礎講座（第2回）	市民文化会館	16人
12月15日	リース作り教室	サンワーク下田	18人
2月22日	料理教室（第1回）	中央公民館	25人
2月28日	オリーブオイル講習	道の駅 開国下田みなと	6人
3月8日	栽培基礎講座（第3回）	市民文化会館	19人
3月20日	料理教室（第2回）	中央公民館	25人
3月25、26日	苗木配布	爪木崎グリーンエリア駐車場	117人
3月27日	植樹体験講座（第2回）	白浜	17人

平成 30 年度			
開催日	開催内容	会場	参加者
8月21日	栽培基礎講座	市民文化会館	35人
9月28日	新漬け教室	中央公民館	25人
12月15日	リース作り教室	サンワーク下田	21人
12月20日	病害虫講座	市民文化会館	34人
1月23日	病害虫講座（夜間開催）	市民文化会館	6人
3月13日	料理教室	中央公民館	25人
3月24、25日	苗木配布	爪木崎グリーンエリア駐車場	54人

市民への苗木配布

下田市オリーブ苗木配布事業			
平成 29 年度			
配布年月日	平成 30 年 3 月 25、26 日		
配布場所	爪木崎グリーンエリア駐車場		
配布人数	117 人	配布本数	490 本
平成 30 年度			
配布年月日	平成 31 年 3 月 24、25 日		
配布場所	爪木崎グリーンエリア駐車場		
配布人数	54 人	配布本数	250 本

市内オリーブ分布状況

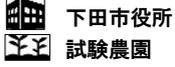
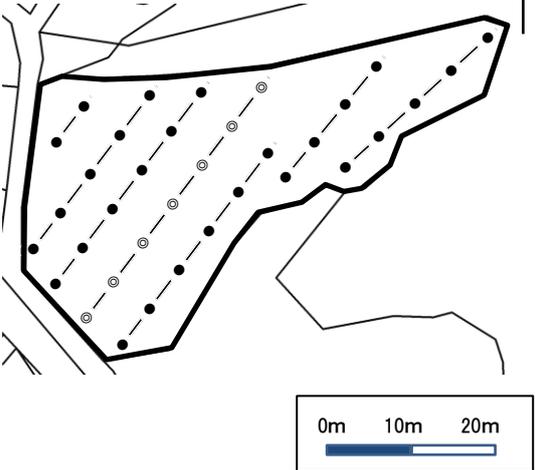
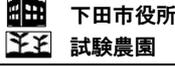
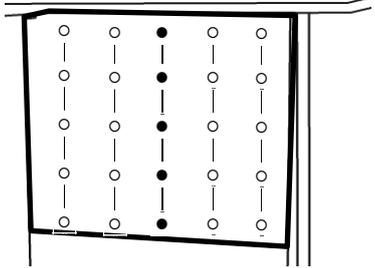
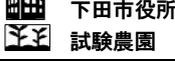
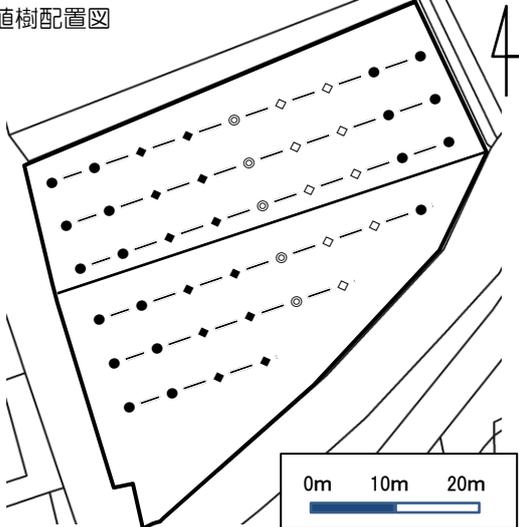
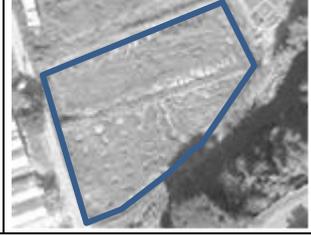
- 稲梓 (120)
- 白浜 (79)
- 稲生沢 (76)
- 浜崎 (63)
- 朝日 (118)
- 旧町内 (34)

地区名 (配布本数)

§ 下田市営オリーブ試験農園

当市では平成 29 年度より遊休農地を活用した、市営オリーブ試験農園を設置し、地域おこし協力隊の参画を得て栽培実証を行っています。将来的には栽培実地講習や研究機関による基礎調査のフィールドとなることが期待されます。

※植樹配置図は H29.11 植樹時点のものです。

No1	大賀茂試験農園	植樹年月 平成 29 年 11 月	植樹配置図
概要 面積 1,194 m ² 地目 田 備考 休耕地の利用 		品種名 / 数量 ● レッチーノ 28 ◎ ペンドリーノ 7 計 35	
 			
No2	吉佐美試験農園	植樹年月 平成 29 年 11 月	植樹配置図
概要 面積 837 m ² 地目 畑 備考 休耕地の利用 		品種名 / 数量 ● レッチーノ 5 ○ フラントイオ 20 計 25	
 			
No3	椎原試験農園	植樹年月 平成 29 年 11 月	植樹配置図
概要 面積 1,798 m ² 地目 田 備考 休耕地の利用 		品種名 / 数量 ● レッチーノ 19 ◎ ペンドリーノ 5 ◆ イトラーナ 12 ◇ ノッチェラーラ デルベリーチェ 9 計 45	
 			

① オリーブを知る

オリーブは比較的育てやすい植物とされていますが、樹を健やかに育て、活用するためにはオリーブのことをよく知る必要があります。ここではオリーブに関する基礎的な知識をご紹介します。

(1) 果樹としてのオリーブの特徴

オリーブは地中海沿岸地域を起源とする、モクセイ科の常緑性中高木です。土壌環境が良ければ10m以上に成長します。樹齢は数百年以上と言われ、多くの品種が存在します。オリーブ栽培は紀元前に遡り、地中海沿岸地域から周辺諸国へ、海上交通の発達に伴いアメリカ大陸に伝播し、現在では中国、オーストラリア、南アフリカ、日本等で経済栽培が行われています。国内栽培の歴史は100年程度ですが、小豆島中心に栽培の研究が続けられ、近年は全国に栽培が拡大しています。

(2) オリーブの品種について

諸説ありますが、世界中で1,000品種以上あるといわれています。品種により含油量、樹型や耐候性等が異なり、営農の観点から品種の選定は非常に重要な要素です。また、オリーブには同一品種同士では受精・結実しにくい自家不和合性が高い品種が多く、果実を得るためには2種類以上を栽培する必要があります。

○品種により左右される要素（一例）

含油量、早晩性	含油量が多いとオイル用に向きます。また、果実が熟し、含油量が増加する時期も品種により異なります。
樹型	直立性（上に伸びる）と開張性（横に広がる）があります。開張性の場合、樹間を広く確保する必要があります。
実の大きさ	実が小さいほど収穫作業量が増えます。収穫方法の検討が必要です。
花粉量	花粉量が多い品種は授粉樹に向きます。

主なオリーブの品種

○下田市で主に栽培（配布）されている品種

品種名	主な用途	樹型	実の大きさ	原産国	備考
レッチーノ	兼用	開張性	中	イタリア	
フラントイオ	オイル	開張性	中	イタリア	
ペンドリーノ	オイル	開張性	中	イタリア	授粉樹
イトラーナ	兼用	直立性	大	イタリア	
ノッチェーラデルヘリーチェ	漬物	開張性	大	イタリア	
レッチョデルコルノ	オイル	開張性	小	イタリア	

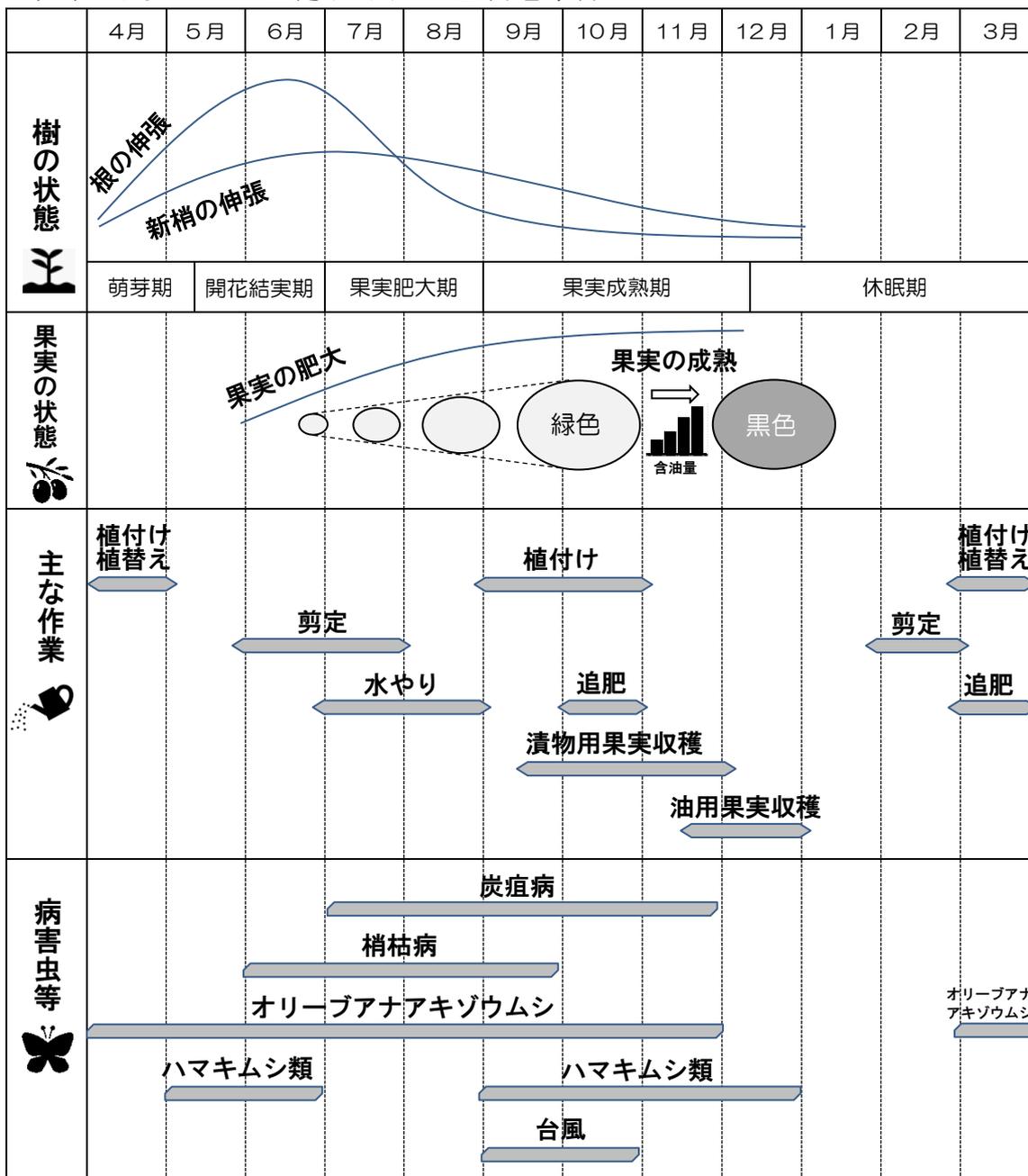
○小豆島で主に栽培されている品種

品種名	主な用途	樹型	実の大きさ	原産国	備考
ミッション	兼用	直立性	中	アメリカ	
マンザニロ	漬物	開張性	中～大	スペイン	
ルッカ	オイル	直立性	小～中	不明	
ネバディロブランコ	オイル	開張性	中	スペイン	授粉樹

○その他代表的な品種

品種名	主な用途	樹型	実の大きさ	原産国	備考
ピクアル	オイル	開張性	中～大	スペイン	
コロネイキ	オイル	開張性	小	ギリシア	

(3) オリーブの生育サイクルと栽培条件



○オリーブに適した栽培条件

気象条件	
気温	年間平均気温 14～16℃の温暖な地域が栽培適地ですが、比較的低温に強いと言われていています。また、冬から春先の平均気温が 10℃以下でないとう開花しにくいとされます。
日照量	日照量が多いほど生育が良くなり、年間日照時間 2,000 時間以上が望ましいとされています。なるべく、南向きの日あたりの良い場所が栽培に適しています。
降水量	乾燥を好むとされていますが、良好な生育のためには年間降水量 1,000mm 程度は必要とされています。
風の強弱	病害虫を避けるため風通しの良い場所が望ましいとされています。一方、オリーブは比較的根が浅く、倒伏しやすいため防風対策が必要です。
土壌条件	
弱アルカリ性で排水性の良い土壌を好みます。植付け前には苦土石灰で酸度調整し、完熟堆肥などで養分と水はけを確保しておくのが基本です。	

(4) オリーブの病害虫等とその対策

オリーブは他の果樹類と比べて病気や害虫に強いと言われていますが、自然の豊かな日本では、病害虫をはじめとした原産国とは異なる被害が考えられません。オリーブの樹を健やかに育てるには、適切な被害対策が求められます。

オリーブの主な病気		主な対策
	炭疽病、梢枯病 など	農薬の散布、感染拡大防止 など
オリーブの主な害虫		主な対策
	オリーブアナアキゾウムシ、ハマキムシ類、スズメガ類、カイガラムシ類、コガネムシ類、カメムシ類 など	園地の管理、捕殺 農薬の散布・樹幹散布 など
その他		主な対策
	ニホンジカによる食害 台風による塩害、倒伏 など	電気さく等の設置 支柱の設置、植樹場所の選定 など



オリーブ栽培において特に注意が必要なもの
対策を怠った場合、オリーブの生育に特に影響の出るものについて取り上げます。

①オリーブアナアキゾウムシ

概要	ゾウムシ科の在来種の昆虫です。体長 12~14mm。本州、四国、九州、中国に分布します。日中はオリーブ根本周辺の落ち葉、敷き藁、雑草等の下で静止し、夜間になると活発化し、樹上で摂食、交尾、産卵します。	<p>実物の大きさ</p>   <p>オリーブアナアキゾウムシ成虫</p>
被害	成虫は3月下旬から11月上旬まで活動し、地上付近の樹皮に穴を開け産卵します。孵化した幼虫はオリーブ幹内部を食害し、多数の幼虫が侵入すると枯死を招きます。オリーブの天敵といえる昆虫です。	
対策	成虫を見つけたら速やかに捕殺します。幼虫が食害していると根元におがくず状の痕跡があるので、根の周りを常にきれいにしておくことで早期発見につながります。また、スミチオン系農薬による防除も有効です。	

②ハマキムシ類

概要	葉を糸でつづり合わせて身を隠す、ガの幼虫の総称です。オリーブの場合、代表的なものはマエアカスカシノメイガやチャハマキなどがいます。複数の種類が4~11月まで広く発生します。	 <p>オリーブの葉に身を隠す幼虫</p>
被害	葉や新芽を食害します。木の成長を阻害するだけでなく、オリーブの魅力の一つである美観が損なわれてしまいます。発生期間が長く、長期的な対策が求められます。	
対策	幼虫を見つけたら速やかに捕殺します。葉の裏に卵を産み付けていることもあるので注意深く観察することが必要です。発生初期にはデルフィン系農薬による防除も有効です。	

③ニホンジカ

概要	日本に広く分布する哺乳類です。草本、木葉、若芽、樹皮など多様な植物を季節によって食べ分けます。本来は広葉樹林や草原などに生息する動物ですが、近年、人里に近づくようになり、全国で農作物への食害が深刻化しています。	 <p>樹皮を食害するニホンジカ</p>
被害	食性の広さからオリーブ苗木への食害が懸念されます。食害を受けた場合、成長の阻害や樹形の変化、被害が大きければ枯死することもあります。	
対策	電気さくやワイヤーメッシュによる侵入防止措置が有効です。農地全体を囲うのが難しい場合には、個別に保護することも必要です。	

④炭疽病

概要	炭疽病は糸状菌（カビ）の一種が侵入することで、葉や枝、果実などに発生する病気です。雨の多い時期に多く発症し、感染すると黒いぶつぶつを伴う、褐色の病斑が同心円状に広がっていきます。	 <p>炭疽病の発症した果実</p>
被害	葉や枝に発症した場合、生育が阻害されます。果実に発症した場合には商品価値が無くなります。胞子により伝播するため、放置しておくと農園内に感染が拡大する恐れがあります。	
対策	剪定により風通しを良くすることで、発症を抑えられます。発症してしまった場合には、感染した枝や果実を農園外で処分し、感染拡大を防ぐ必要があります。ポルドー系農薬による予防も有効です。	

⑤台風

概要	台風は北大西洋に存在する熱帯低気圧のうち、低気圧域内の最大風速が約 17m/s 以上にまで発達したものです。日本には8～9月頃に多く上陸し、各地に多くの被害をもたらします。	 <p>台風により倒木したオリーブ</p>
被害	オリーブは比較的根が浅いため、強風による倒木の被害が発生することが懸念されます。また、海岸付近では巻き上げられた海水による塩害が発生しやすくなります。	
対策	支柱による補強の他、風の抵抗が少なくなるように仕立てることで被害を軽減できます。倒木や塩害が発生してしまった場合には速やかな復旧、除塩が必要です。植樹場所の選定も重要です。	

Point 農薬・電気さくの適正使用について

本項でご紹介した病虫害や獣害の対策には農薬や電気さくの活用が有効です。しかしながら、それらは適正に使用できなければ、効果がないばかりか、人々の健康や生命を脅かす可能性があります。本事業では農薬・電気さく等の適正使用についても市民講座等を通じ、周知していくものとしします。

(右)「農薬適正使用のポイント」
緑の安全推進協会

(下)「鳥獣対策用の電気さくについて」
経済産業省





育てる（植える・実らせる）

果実の収穫を目標とするオリーブ栽培を成功に導くには、栽培の普及・拡大だけでは事足らず、オリーブの特性などを十分に認識したうえでの適正な栽培管理が必要となります。オリーブの健やかな成長と実りある収穫を目指し、官民一体となった栽培支援に取り組みます。

ステップ1

①オリーブ栽培に関する知識の周知徹底

オリーブ栽培に関する知識の周知徹底を図るため、市民講座を継続的に開催します。基礎から応用まで幅広い内容で開催することで、より多くの方々の参加を促します。

○市民講座の一例

基礎

- ・栽培基礎講座
- ・病害虫対策講座
- ・獣害対策講座
- ・気象災害対策講座
- ・土壌改良講座
- ・鉢植え講座 など

応用

- ・剪定、仕立て講座
- ・挿し木講座
- ・有機農法講座 など



【参考】オリーブ病害虫講座資料
「オリーブの病害虫とその対策」
協力：伊豆白浜オリーブ園

②オリーブ苗木配布事業の継続

平成29年度より開始した苗木の配布事業を継続し、オリーブ栽培普及に努めます。配布は下記のスケジュールにより実施します。

○下田市オリーブ苗木配布スケジュール

▼8月～10月 申請受付

配布希望者は希望本数と植樹箇所を記した申請書を市に提出します。

▼11月～12月 現地確認

希望本数の多いものを中心に、現地確認を実施します。確認事項（面積、日当り、獣害の有無等）

▼2月 配布決定

配布決定を受けたものはオリーブ植樹の準備を進めます（土壌改良、鳥獣対策等）。

●3月末 苗木配布

※オリーブによる営農を計画し、熱意のある方に対してはスケジュールの前倒しを検討します。

Point

オリーブ栽培に関する相談を随時受け付けます。また、配布希望者については市民講座への参加を推奨します。



オリーブ苗木配布の様子

○下田市オリーブ苗木配布事業計画

(配布本数はH29, 30は実績、R元以降は予定です)

	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
苗木配布	490本	250本	250本	200本	150本	100本	50本	0本
累計	490本	740本	990本	1,190本	1,340本	1,440本	1,490本	1,490本
植樹面積	9,800㎡	14,800㎡	19,800㎡	23,800㎡	26,800㎡	28,800㎡	29,800㎡	29,800㎡

※1本当たり20㎡で試算

③下田型オリーブ栽培方法の研究（基礎）

オリーブは地中海沿岸地域を起源とする植物です。下田市の気候・風土にあった栽培方法の確立を目指します。

○オリーブ研究会の発足

オリーブ栽培者により運営される研究会の発足を目指します。栽培者ネットワークの形成による情報共有や技術向上が期待されます。



植樹体験講座の様子

○実地講習の開催

市民講座（座学）を補完するために、市営試験農園や市内オリーブ園地を活用して実地講習を開催します。
（例：植付け講習、剪定講習、鉢上げ講習 等）

○研究機関との連携

研究機関と連携し、オリーブの基礎調査に取り組みます。市内オリーブ園地を調査フィールドとして提供し、得られた知見は本事業にフィードバックします。

・調査フィールドの提供



市内オリーブ園地



研究機関

・基礎調査
・情報提供



静岡県伊豆農業研究センター

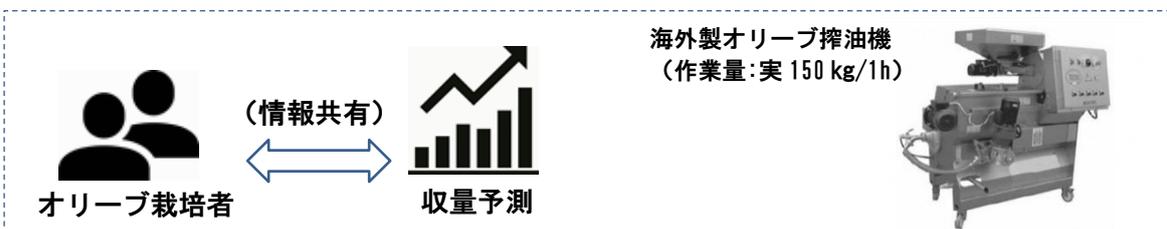
ステップ2

①下田型オリーブ栽培方法の研究（応用）

ステップ1により得られた知識や経験を基に、効率的な収穫（早期の収穫、収量の増大）が見込める高度な栽培技術の確立、事業拡大を目指します。なお、基礎的研究は継続して取り組みます。

②オリーブ搾油機の導入検討

オリーブ搾油機の導入については市内オリーブ栽培者と情報共有を図り、翌年以降のオリーブ収量予測をしたうえで、収量に見合った規格の搾油機の導入を検討します。





地域づくり（市民参加・人材育成）

オリーブを活かした地域づくりは、果実の利用はもとより枝葉の利用や樹を育てる楽しみ、鑑賞する楽しみなどのオリーブの魅力を最大限に引き出し、それらと呼ばび水として多くの市民参画を得ることで成し遂げられるものです。市民参加を促し、将来のまちづくり担い手を育成する取組を実施します。

ステップ1

①景観としての植樹と日常生活への活用

公共施設や飲食店、宿泊施設等または個人宅へのオリーブ植樹（鉢植え）により「オリーブのまち下田」の景観形成を推進します。併せて、果実や枝葉の利用、リースや草木染めなどの手芸利用、盆栽などの市民の日常生活に密着した活用方法を提案します。



食用オリーブと工芸用・景観用オリーブでは農薬取締法に基づく、農薬の使用規定が異なります。

②オリーブのまちづくり担い手の育成

栽培普及から商品化といった多様な取組みを継続的に実行する、事業推進の中核を担う人材を掘り起し、育成するため体験講座やワークショップを開催します。



オリーブ料理教室の様子
（協力：下田東急ホテル）



オリーブの活用例（協力：伊豆白浜オリーブ園）
（左）オリーブの盆栽 （右）草木染め

③地域資源の探索と活用

下田市は里山と海に囲まれ、豊富な地域資源に恵まれています。これら（未利用）地域資源を探索するとともに、オリーブ栽培への活用を模索します。



海藻類（カジメ）



竹チップ（パウダー）

・どちらも土壌改良剤として有望視されています。

○下田市の地域資源

里山の地域資源

落ち葉、ぬか、もみ殻
稲わら、竹 他



海の地域資源

魚介類残さ
海藻類（カジメ等）他



ステップ2

①担い手を中核とした事業推進体制の確立

本事業の推進体制は、推進委員会主導のものから、担い手が中核となり企画・実践するものへと段階的に移行していき、将来的に体制確立を目指します。



活用する（商品開発・事業化）

他地域と差別化を図るためには、市民生活と結びついた、市民自身による商品開発、活用方法の提案が鍵となります。市民参加型の商品開発、その仕組みづくりに取り組みます。

ステップ1

①オリーブを活用した商品開発に向けた検討・試行

栽培技術の確立と並行し、将来の活用方法を官民連携のもと検討に取り組みます。

○商品化アイデアの提案と蓄積

研究会やワークショップを介して栽培者、主婦、学生、飲食関係者、医療・福祉関係者、推進委員など多様な人材による、情報交換とアイデアの蓄積・商品化試行に取り組みます。

○先進事例の研究

オリーブ振興事業は小豆島をはじめとした、日本各地で取り組まれています。それら先行事例を研究（情報交換・現地視察）し、商品開発のヒントとします。



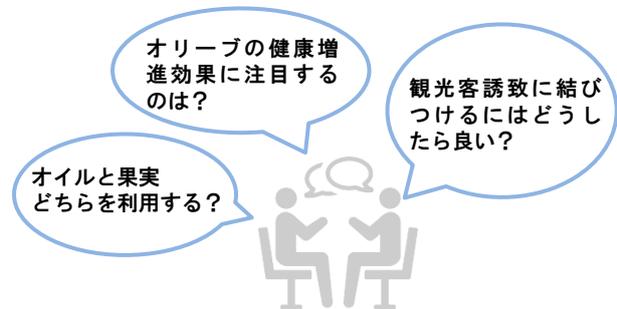
県内オリーブ事業
(伊豆急ホールディングス㈱ など)



小豆島（香川県）

Point

議論を重ね新たな発想を生み出します



○商品開発のヒント

1.オリーブ 	2.販売 	3.魚介類
4.観光 	5.健康 	6.景観
7.料理 	8.工芸 	

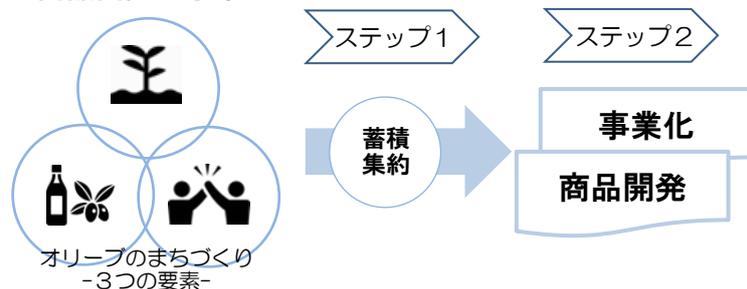
New
新たな発想

ステップ2

①オリーブを活用した商品開発・事業化の実践

オリーブが順調に育てば収穫が期待される時期となります。ステップ1で築き上げたもの（育てる・地域づくり・活用する）を集約し、商品開発・事業化に取り組みます。

○商品開発・事業化のイメージ



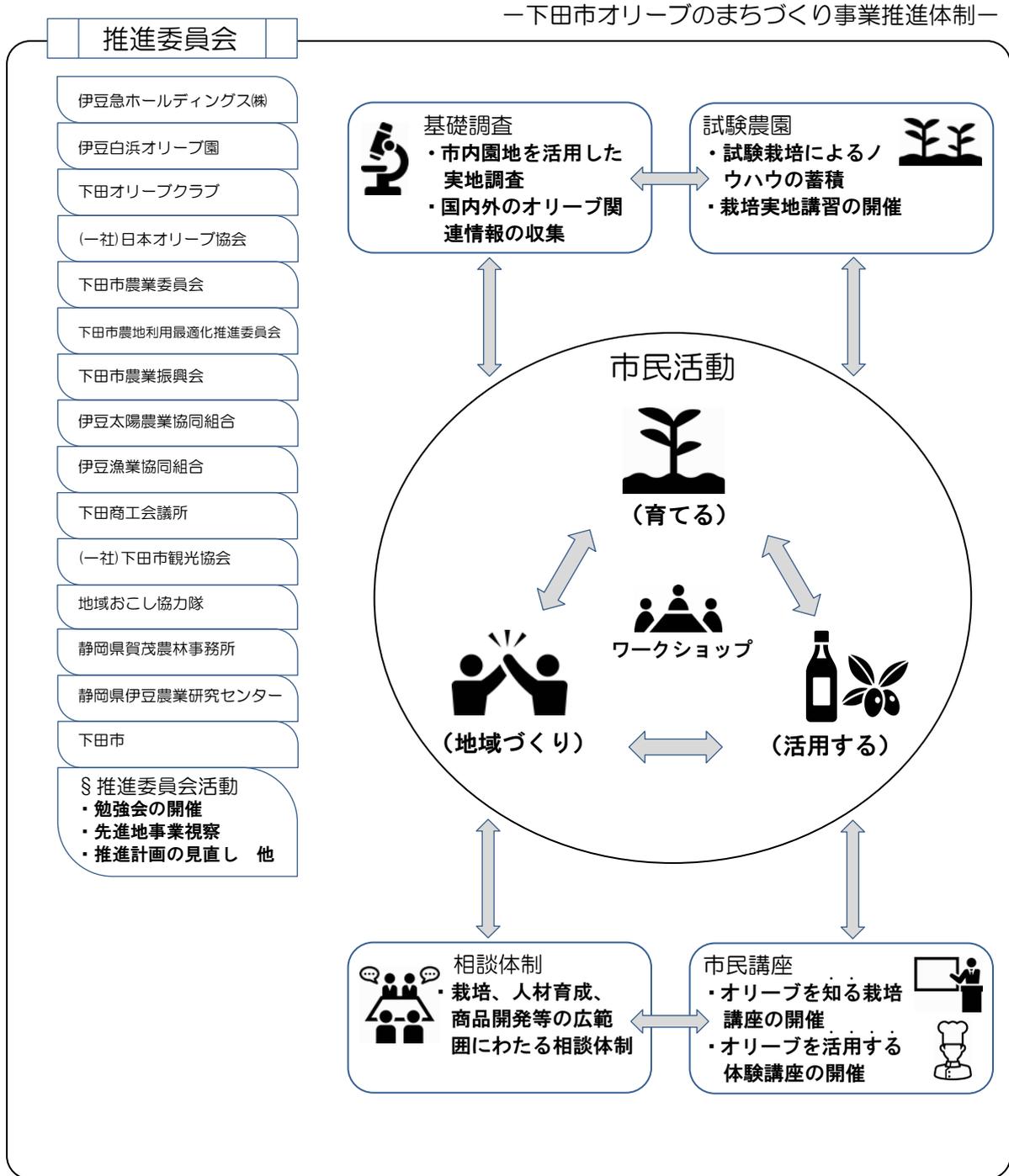
商品開発の例
(左) オリーブオイル (右) 砂糖漬け



協力：伊豆白浜オリーブ園

§ 推進体制

本事業は下田市民による創造的な活動を中心に据え、推進委員会が各々の専門分野に応じ、包括的にサポートする体制により推進します。推進委員会と市民は連携をとりながら「オリーブのまち下田」の実現に向けて各事業に取り組みます。



発行日 令和元年6月
発行 静岡県下田市
編集 下田市役所産業振興課
静岡県下田市東本郷 1-5-18
TEL : 0558-22-3914